Vol421

D470

仁義礼智忠信孝悌

一 鷹
二 鷹の名
三 和漢狩圖の鷹
四 鷹の生毛
五 同飼様之事
六 同呼取之事
七 同逃る
八 同落る
九 同捕様之事
十 同終る
十一 同地取之事

十三 同雉と搏事

十五 依國鳥の異名

十七 鳥巣栖來のこと

十九 鳥の異名

廿一 鷹と捕時節并ニ網ちらへ事

廿三 上古の名鳥

廿五 鷹を放事

廿七 同病のもの付タリ療治

廿九 鷹近づく事

卅一 鳥に付く蚤虱

卅三 鳥物乃異名

卅五 奥州鳥の巣の名

目録畢

拳



中の悼(とう)無(な)く天地乃(の)あひだ(だ)に鷹(たか)の圖(づ)を掲(かか)げ侍(はべ)りけるに王(わう)大人(だいじん)これを見(み)て

七月(しちぐわつ)半(なかば)なく古史(こし)を稽(かんが)へ載(のせ)おかれ侍(はべ)りくるをもとせ

秋(あき)なれば鷹(たか)乃(の)雙(ならび)なきことの又(また)

善吏(よきつかさ)は猛(たけ)き政(まつりごと)為(なり)鷹(たか)乃(の)雙(ならび)なきことは猛(たけ)き君(きみ)と良(よき)臣(しん)と

ごとく加(くわ)ふるに仁(じん)恕(じょ)を以(もつ)てし給(たま)ふ

猛烈(たけきこと)神(かみ)の如(ごと)くなれども

のごとく逸(いつ)遊(ゆう)三(さん)昧(まい)ならず

猛烈(たけきこと)神(かみ)の如(ごと)くなれども

乃時より帝代用ゐ給ひ漢
我朝その神功皇后
くぐ百済より
後人申十七代仁徳天皇
庶より尊き鉄
とそ
よ鷹
逐ふなり
ふそくいふ
小冲
座
ひのえ
じょ
みと
のう
ひのと
ひのえ
ひのと
ぼのえ
ぼのと
つちのえ
つちのと
かのえ
かのと
みずのえ
みずのと
きのえ
きのと
きのえ
きのと
ひのえ
ひのと
ぼのえ
ぼのと
つちのえ
つちのと
かのえ
かのと
みずのえ
みずのと
きのえ
きのと
きのえ
きのと
ひのえ
ひのと
ぼのえ
ぼのと
つちのえ
つちのと
かのえ
かのと
みずのえ
みずのと
きのえ
きのと

勇備武具等物也其外
奮の諸戯乃業より外なく
乃壮年あるともみな水泡
看ぐそんぢ
看れる時の物備の通り
校列れる赤備校とやら
乃害とみそんるあれいたり
山野の物備かなる軍場ふ
乃水とらびて指物おそ
八陣乃引よあらひ
武家乃用ふいづれ

鷹の是ともまだ発初雑の人よ兄あ
わまま
背く鷹の体にて
そのかりこぶ
其外鷹あまたあれども一切の故事用ゐと書なりと
かぶりこぶ
按摩ごく名付摔小攫付
びょうぶ
屏風の付物
ゆきまた永遊猟とて
むじん
夢幻の琴小色なぞ
そそくさ
狩鷹總論
鷹鶻の名一般なれ
小和朝まそのほか十八鷹あ

雀ハ穀ヲ食ヒ鶏ハ虫ヲ食ヒ共ニ人ニ益アリ其
實ハ鶏ハ雀ヨリ大ニシテ肉多ク味美ナリ故ニ
鶏ハ雀ヨリ飼ヒ易シ鶏ハ幼キ時ヨリ飼ヒ馴ラ
セバ人ニ狎レテ去ラズ雀ハ人ニ狎レ難シ又自
ラ食ヲ得ル事鶏ヨリ巧ナリ鶏ハ穀ヲ食ヒ雀ハ
穀ヲ食ヒ虫ヲ食ヒ鶏ハ穀ヲ食ヒ虫

搏ゟ色ゝ教ゟまゝ
面一叶ゟ
ゟ面ゟ
ゟ

奥ゟ
宝ゟ丁
卯歳正月吉辰
書林
堀内寿時
椿軒梓

大鵬鳥之畫



青くいひ征鳥といひ
又晨風ともいて代なと
よそれも名かはりて異れ
をもそはそれ
物よくく校名
のたうはりてし
四十一種よそに
もの今和漢
たうも名ことを
くにものとる
ごとく

角鷹

(二)鷹入猪名
大鷹
角鷹
隼
鳴雄鷹
黒鷲
鵰
山鷲
鵰
鵰
小鷹
鷲鷹
鵰
通鷲
鵰
鵰
鵰

赤鮫　青鮫　斎濃
鮫下鰄　底鮫　鰄鰈
野神　水鷹　姉鷹
兄鷹　鯆　負鷹
巣鷹　頬玄　月毛
万巣鷹　上鳥鷹　深山鷹
鯉丸　鯉切　白鷹
いぶし鷹　指鷹　岩鷹
鶻　梅花鷹　鳶
鷲　鷙　鷲
鷲　鷲　鷲
鷲　鷲　鷲
鷲　鷲

羽倶利迦羅
妻板尾
尾長鳥
捨田鳥
耳安鳥
耳離鳥
意冨沢鳥
小屋像尾鳥
文字屋像尾鳥
像尾鳥
尾長鳥
逆さ尾鳥
鵐模様鳥
鵐形鳥
九官鳥
青鳥
鸚鵡鳥
黄鳥
楊名鳥
玄冬鳥
松下鳥
後居鳥
士板鳥
縞居鳥
まま子鳥
八尾鳥
浜大鳥
羽白鷺
浩の一メリ鳥
羽倶利迦羅



羅鷹　老鷹　鵰鷹　三枝鷹　肥鷹　菊着鷹　仕據鷹　行鳥鷹　良鷹　形鷹

鷹の雌　保姫鷹　生大鷹　雀鷹　七鳩鷹　古鳩鷹　おし松　おし行松　西松　鵄鷹　日次鷹　鵄鷹　天く鷹　山毛鷹　和鷹

毛短　毛高　毛細　毛生　毛荒　毛黒　毛赤　毛白　毛斑　毛雑



鷹之部

矢鴾　尻鴾　翼鴾　羽鴾　背鴾　胸鴾　腹鴾　股鴾　脛鴾　跗鴾　指鴾　爪鴾

鳥之部

深山鳥

鷹



白雪
小白
大白
後翰白
雪柳白
小眉白
尾白
背白
市白
大眉白
足白
羽白
まだら白
眉白
白雪
小白
大白
生
小黒生
生
楊生
松
生

くろ志ろ
(四)尾ハ狐のごとく
おゝきなる尾かと
おもへバおゝきなる
らーハ鈴のごとく
尾そて六枚ありて
太とくまのごとく
鷲鷲よりハ
のそよたとく
尾そおゝくして
十四枚ありて
右ハ尾三枚と
のこーハ
の尾一の
過渡くい
と雖

小鷹（こたか）

羅ういひ十
とねりねり
とぶらふ歩渡
といふだ
二牧のほ
を雉古女
ういねを
とふいづま
く糸利を
ふゆ人阿
にく翁牧
そうね羽ば
ふ夫母裂だ
四十い牧ね
つ三つこ同
めほうよう
こてそ手く
後ろそ女に
のまい平

兄鷹



小白鷹

大鵬（おほとり）



とりてそのまゝ
鳥飼ふ事
鳥飼ふ事
熟して
こゝろしめよ
いそぎ
あとより
こゝろして
ざるとの
ちよと
まと新
いめうに
を入
てくらし
と盆の
て水と
人をおそ
まぢん



鳥の鷹うつ

くゑと氷よひうして
ゑの巣のうくをぬ
らそうくれへるがま
おけう水そうくと
ちじとのくし茶匙
よとうくよそく
いてもよくそく
いくう晴
う巣へ飢よそこ
ゑどそして飽よそこ
かうかたうかうして
影ゑるよう崔鵐鳩
そのおもくとおもく
とうくはひくして雛
ら巣の鵐屋
と作るくれよそ
ら巣子知そく

白生鷹



わかい肉は乾かして
不潔のまま水よひたして
分解をとゝのへ
食べると衛生上けしからぬ
寒餓をしのぐ極
食体そこなふ
冬肥ゆ
夏痩やせ
病やんだあとそう秋へ
肥えたものやう
痩せたものやう

鴉



鶻鷹





海上鷲（さゝきあがりたる）

六 鵰（わし）と居やうの事

それ鵰（わし）多（たり）へ鵰（わし）の法（のり）ありて一ツとしてかはる事をしらず。また時（とき）をそこなはずくいあるものをいふことばにいへるごとくたとへ鵰（わし）の法（のり）をしらずとも鵰（わし）をとりたる人（ひと）にとひてそのとりやうをまなびとりてもよくそだてあくまでもとりおとすことなかれ。

蜂鵰（くまたか）



さゞめ鷲のうと
びなどを
はくまんで
さけうひく
うなり、たこ猟
ふいてそこと
わりなど
まく、隣よ
こをよすり
えそこたり
て用をそく
りゆゑよ
そくもゆよ
よくうまてそ
ゆしくそ隣
よとゆうそ
乃ち一報

鵰鷲



のゆよみよひろ
都の尾をそ
えてせりうん
とととそそて見
さしろとよの
もも

七

呼び
新鷲とよび
ちえすひいろよ
らそて脚
なまよびる
ちはめあ
まびあ
まらぶもの
もたそ
ふ鷲とい
称よ鉦とえ
すびて

前後尾鷹



餌をとるそのうまさよ
ゐなかとたのそのよさよ
餌をとるそのうまさよ
きこうれ
よびわかれ
中うちひいきそ
のうるおいそ
ふまよのぼりてゐり
ざる曲わざわざ処
餌ん兎さかにる架ろう
よろこびそんべへぞ
架とそうぞー
やぐもち餌とうぞー

石疊尾雇鷹之圖

しんそうめいをおてこ飢やじ
かもとくそれべうら
にまよりそめ
八放う
新宮と養てまず
診とかそうれ晴ろ
よ殿そ一お鳥
てそ鰯を
そぐそ
架ろ
てそろ
ぞれのく
おうまそ
て宮そ
うそ食
自殺

幼鷲

山鴉鷹



逆生尾の鷹



いろどりもたびたびくるそ
れぬればなつものもひやひやとおもはれ
みじかきよもいつしかあけてくるそ
てくらすさまもいとせはしきものなり
まてなすこととてもなきにいとゝ
ながきつきひをいかにくらさんとおもふ
お湯殿のはやくたてまつれとこうんにおしてわん
たうあるもいとうるさくおもはるゝ
秋のよは午の時ともなれば
時節とおもひしられてものさびしきに
たゞ旧ふるき物語よみて猟をとる
ようなどしてくらす

九 逸

逸そうたがたり
逸そうの物語を見たまふ
てすびそうをとる
いまそうをとる



真榛尾たか

だうぐいろ〳〵そろへ雑之
いろ〳〵雑とながれ
るいたるぐにて鷹の
えつくろわよそ
つたかもしれ
こ礼をえつはく
びそろへえ
礼箕をさて
まわそ
こやぐそ竿縄とか
けるこいろ雑そろ
るそろへぐの
えぐよけるおろ
そるよひろ
のげひそろ雑のぐ
していろ雑
そにえそれぐ

紫鷹



野編鷹（さしたろう）

こびそろてくる
ものうりひいゆく
くとおてきるさ
どぞして飼てや
ゆやうもおりま
うへよそあつてと
ほよ四方一里そ
てそゆやうのう
化う鷲をとて
びそゆやうに
ばそし

十 鈴のう

鈴いらいくる
るをようと
飼よそらいられ
けやをも鉄をと
し雀うよくる
をそて（たり）るく



くらもちしてやるうに
癒と寿ぎてろくろくび
ひろくれてそびえべそと
さにさ向ふよげなり
そこ仏
十二架のうち
架いけろ
うぶむ
うずん物
ろをそ
陽とそ
ぬろけ
ろをよ
格柱架托格格外格格格格格
野格憂着

万歳鷹

格子の格まもれば
のりともまことあり
(三)北祝うなり
そも鷲おおたか
へどを北祝をも
あるもまれば
祝
海がめよ山わりて
家はあるも
のぞ北
とうまよ大
まみて
見ぬ
ぐう
おおひ

鯉切鷹



高砂をもろざ
てくるものみ
るわげ(上)ばこそ
らばそれをも
うてわろざ
いふうてよ
びもどろ
(十三)雉とな
雉ふくろう
てよこそ
へそばで
野よむ
こぶよ林ま
次ぶ雉むろ
こそろて
よばそたろ
雉たろ
くそぬ



虫喰鷹

足大鷲



鷹のそだちやうは性質それ鷲は性質うけくしてそだてやすし猛をてそだてやすし猛をてそだてやすし猛を猛白猛してそだてやすし猛を猛白猛しくそだてやすし猛を猛白猛しくそだてやすし猛を猛白猛しく

龍腦丸
龍腦 人參 各三分
右三味末之合研細末絡
脳と入りさはるやうにめ
つ用ゐ毎服二丸白
當歸散
當歸 白朮 各一分 大黃 三分
右二味末之重復

目白鶫

みくさ　ちから　ゆでて

皂角刺　皂角　甲散
皂角　五分

わさびの葉　ゆでて
まぜんこと
ほせんじ
ほしてこなにする

黄連　大黄
蒲黄　黄柏
人參　各一匁

右こなにして
まぜよせんじ用ゆべし

朱砂　雄黄　各一分
麝香　半分
三稜　三分

右こなにして
やはり砂敢

鳩顏鷹



山梔子 千金子 各一分
大戟 甘遂 黄芩 各一分半
右令細末猪肝丸
如菉豆大 毎服三九 五九 白湯
送下 日二服 小児量便
如上法煎湯
右剉如麻豆 毎服三銭
水煎 空心温服
水銀散
水銀 半分
麝香 各一分
右為軽粉 乳鉢
研匀 毎服一字
温酒調下 食後
服之 如有
虫積 加使君子
仁 炒黄 同為
末 毎服一銭
温酒調下

眉間鷲



鳥の尿を取りて付ければ即ち治す。

一方、熱い息と

毛をよろづの病に龍胆丸重

連丸を用ゐべし。

一方、息と乳

とをあはせ

るぬさ員

と勇へ

もし朱砂

んべ皂角

らゆる

鷹の物よごろさ

鷹の

當飯散

鷹の

鶻顛鷹

ぶさう嘸わづ〳〵天狗の
まを肉よそ〳〵人
ごとし黄柏實
ちぐ〳〵肉よつ
〳〵〳〵
〳〵を針し
と三七灶よ
〳〵
一鷲の脚趾
肉よ
を針して針
へ王所根を
しまばいゆく
一鷲るぐいて
ぐんい山椒つ津
の男子乳よ
て目よ〳〵
又能能と乳よ

鷲顔鷲



同はうとも
雄腸もよう
一鷲和のよう
同りもも
様よう細来を
なりて自ろ
いもくく
一鷲外抱
色白青し
そうなよい
そんじ肉
うじし
一鷲鼠傷れ
るよい軽粉松
味と細末
しうもう
をりじ
て重便とめ

入見鷲



つぐといゆうめ
一鷲いぐりにた
生つうふい狼まつるざ牙草
う根とせんじめ用べ
しゝ細末しろ
にそみふいてもよ肉
一鷲和しくん
いつい苦参とせん
わるいてうゝ
根而部ふう根二ぶ梨蒸ろ
して疳ぎ黄れん連をく
ゝふ雨うふみとろ
せ肉よつゝみ
おゝ鷹肉をこの
せとふうをこの
みゝ日くに
ろゝいぐりお鷲う

鷲顔鷲



そこ〳〵
ろよろづ
鴨白鶏
をそろ
たろめ
ろろ
まえて
鷹ろ大小
茱を用ゆ
ひべ
いろま
ろよ
もろ
とろ
にて
ろと
ろと
をば

雪下鷹



ゐる。鷹をとらんに
その巣をくさぐさひろひ集べ
くさぐさとりそろへたる
うとをとるものをかひたて
また雉をとるものをかひたて
くまなく調ひととのへ温血肉をもて
ためやすにいえんやうまひととのへ
ちいさく鷹のやまいの
抱ちりまでをとりのぞきて
水をあたへ節ふしてそだてる
ち猟せしめべいよくその上
抱をとりのぞきて飼ぶべし
温血肉をもて
とりぐさをとらんとするひとは
ち中なるをとりて水盒

採花鷹



め祢ぞ乞ふ
乃肉をそぐ免
うへ狂ばやまひて
して忘ろこ
(圭)諸國乃
そま鷹ゐこ
わなるめ
てう天竺
埒ゐ
冊国
い百海
物ゐ
てい警
おてい儼
饗旦
いふそ猟

倭見鷹



てうをそうまいしろ
そちらうち鷲鷲鷲
鷲南蛮鷲猛
毛人鷹 尓毛鷹
内鷹小国鷲
鷲四國鷹鷲西国
築紫鷲
よなり

(十)鷹匠乃
鷲使鷲飼
よい鷹鷲
流よい鷲鷲
仿流よい鷹鷲
也下鳥仿流
鷲鷲
鷲よい鷲
る神津流

桃花鷲



所謂紙衣是也

七 毒扇染茶
　　紅染茶
　　錦染茶
　　柏鼠茶
　　鶸色茶
　　縹色茶
　　小袖茶
　　納戸茶
　　亂染茶
　　縹色茶
　　紺屋茶
　　鼠色茶
　　打紫染茶
　　丁子茶
　　茶染茶
　　皆子茶
　　江戸茶
　　梅染茶
　　鳶色茶
　　藍染茶
　　柿染茶
　　藤色茶
　　紫染茶
　　藍鼠茶
　　紅梅茶
　　紅花染茶
　　紅絹茶
　　紅茶
　　紅鼠茶
　　紅藤茶
　　紅紫茶
　　紅柿茶
　　紅藍茶
　　紅皆子茶
　　紅丁子茶
　　紅江戸茶
　　紅梅染茶
　　紅鳶色茶
　　紅藍染茶
　　紅柿染茶
　　紅藤色茶
　　紅紫染茶
　　紅藍鼠茶

八 字盡
　　足革
　　冠革
　　柏革
　　紋革
　　漆革



箸鷹

入擊（ひきつれて）入擊（いりうつ）事（こと）

放（はなち）鳥（とり）

王朝（わうてう）

雉（きじ）

繫（つなぐ）小指（こゆび）

格踏（かこまたげ）

逢（あふ）

緋（ひ）

逸（いつ）

追（おふ）

祖（そ）

鷹（たか）

鵰（わし）

鷲（わし）

鷂（はいたか）

鷹（たか）

鷲（わし）

鷂（はいたか）

鷹（たか）

鷲（わし）

鷂（はいたか）

鷹（たか

手撃　手
居而撃之　無礙層、
居折　居上
巣外　巣首
巣中　巣里
巣労　巣動
巣迫　梢近
鼠尾繋鈴　鈴枚
金鈸　白金　同死
舳尾袋　舳尾
紅紙鈴　鈴子紙
翁連雀　紙繋　俗繋
大紙紙　小紙
八頭繋　繋轡
把痩掻頁　蛤蜊
為入

鷹之圖



鷹

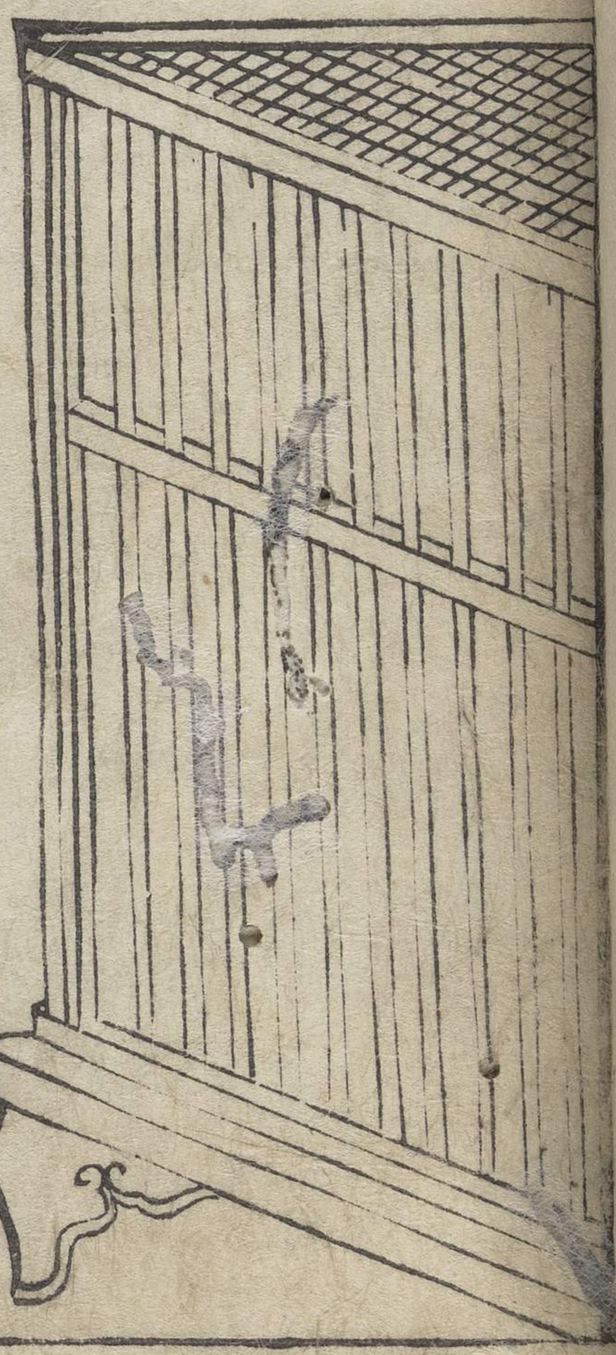
雛間　離る　巣立　帰雁　餌飼　水車　温血　血経　桜釜　羊喰　嘴　嚢　餌飼　四日餌　白　餌飼　孔雀　拵放　一合　才合　石合　羽振　翔　鞠　餌　鶏鳴　鳴　餌　振舞　合釈　羽振　翔　餌　鳴　餌　錆羽　雛羽　格

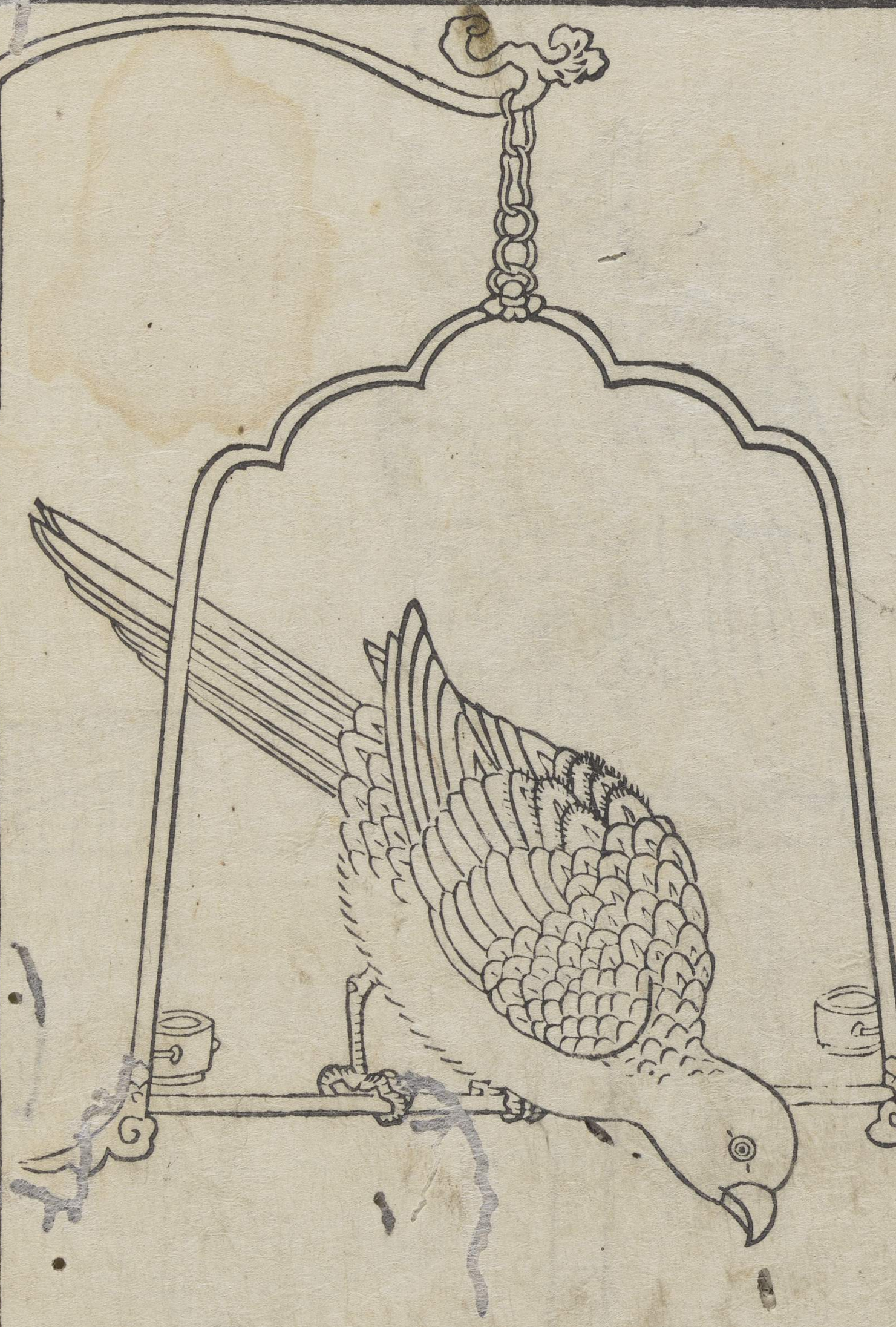


鷲神　鷲舞　猴目食　助飼法　鵰　鷲捕　鵰羽杖　居ル猟ニ　居ル猟ニ　居ル猟ニ　芸入　数鶏　趨鶏　大雄　柄雄　雌ヲ　雄ヲ　雌ヲ　雄ヲ　食鳥　疲鳥　虫ノ多　兄鳥　唯ヲ　雌ヲ　見ル　目潰　鳥ヲ　鷲打　鷲捕　鷲ヲ　軟打　鵰　寝所　思妻　及死

鷹鳥







切無水　岩根の踏水　伏
窠節小竿　月壁　鶚
指多竿　小竿　月壁　鶚
和狩　曉狩　胡狩　鶚狩　鶚狩
草袖細　鞋　狩袴　裁　仔賀袴
黃　走索　走索　打索　走音　走遣
鷽　當　投

(十九)
參の異名乃至
劒翎　鵄名　擊征
胡月　劃　紲　流雲
鶺名　麾天　星眸
鈎　凡　凩翊　制雪
海東青　婆雲君
老奉　玉爪　負崔
青翅　題肩　金距
六翮　(廿)　貪鏃
狗の異名のごし
青曹　韓獹　鉛蹄
白靈　黃耳　烏龍
鴛鴦　南口

(廿一)
參と元時節年二紲
修毫
勻濃

鷲をとる法は七月上旬をえらび八月上旬に至れば雛も大抵飛ぶ時節となるゆえ網ろうらくを以て巣の四方一寸八分縦八十目横五十目にして黄蘗を柿乃実にて汁をとりその色よろしき処へ網ろくりやう傳をぬるなり

(十二) 上古の名鷹

天智天皇の御鷹乃名

一條院の

(十三) 奥羽鷹巣乃名

山村巣

富沢巣

(十四) 鷹乃故事

楚王の夢雲夢ニ遊びてそこそこびろがりしゆめをみて雲指しまでくなりてそびらかつふるみて血そぐ

醍醐天皇の白鷹

後一條院乃黒鷹

黒川巣

矢倉巣

上黒川巣

油田巣

大爪巣

たちもち大おろ名一お北よおろ
話ろぐくとの備い糸ろぐくにて
ごたひろぐ鵜ひるろ名ろ鵜ろれりそれみとれの物とを
さえそ名ろ人よんやろ大鳥とのろ
ろいそなひなるす、おもひくそろぐ
もろとしま遁とろぐくいそ孫よ
ろひろよそろえどそはひよそるられ
ぢ富とろ馬いそろとぐれて労俊
ろのろぐそのかそちを愛とろろ
ろ食せをも一日も猟せぢ
新ろのく孫よ富を壊よ魚とろ
天竺ふて軽尊陛行まくて戸

たてまつりて、帝、叔と毘首羯磨と
ふり、毘首羯磨、変じて鵞となり
りぬ。叔それを見るに、鵞をとりて、
てまもりて、余のものをばえ
ころ、姫、かくて今日の食、あやまれる
そらごとをいひて、余のものをこそ
らばや、とおもひて、食ものよわりて
らぶる姫、すなはち、鵞をとりて食ひ
しとおもひて、姫をうち、ふたつもち
うて食せつ。かくて、帝、叔、一劫とうんと
たまひけん。えんま法王、叔を
叔と知り